

住空間の伝統性・現代性

金沢工業大学 島村 昇

住宅はいうまでもなく歴史的所産であり、また一定の土地に固定される性格から地域的ないし地方的風土性をつよく反映する。ここに住宅の歴史性・風土性が現われ、住宅の地域的・地方的特性を形づくるのであるが、結果としてそれは住空間型（住空間の組織）と住空間量（住空間の規模）の2視点から捉えられるものとする。いわば前者は定性的な後者は定量的な問題であるが、この小論においては紙数の関係もあり、前者に論点をしぼる。後者については別の機会にゆずりたい。

また問題の地域的具體性の必要から考察対象を北陸地方の1都市・金沢に限定している。いわば主題のケース・スタディということになる。さらに現代住宅の原型（伝統性）をとりあえずは近世住宅に見出すので、金沢における近世・近代・現代の3代にわたる住空間（型）の変容過程を概観し跡づけることによって住空間の伝統性・現代性といったものについて論じたい。なお住空間の組織については、主として住宅の平面分析に依拠している。以上のような観点からこの小論は次のように構成している。

1. 近世の住空間
 - 1・1 下級武家住宅
 - 1・2 農家
 - 1・3 町家
 - 1・4 近世における住空間の特質
2. 近代の住空間
 - 2・1 近代における住空間の継承・発展
 - 2・2 近代における住空間の特質
3. 現代の住空間
 - 3・1 現代における住空間の継承・発展
 - 3・2 現代におけるL系空間の組織
 - 3・3 現代における住空間の特質
4. 現代における住空間と住様式の問題
むすび

1. 近世の住空間

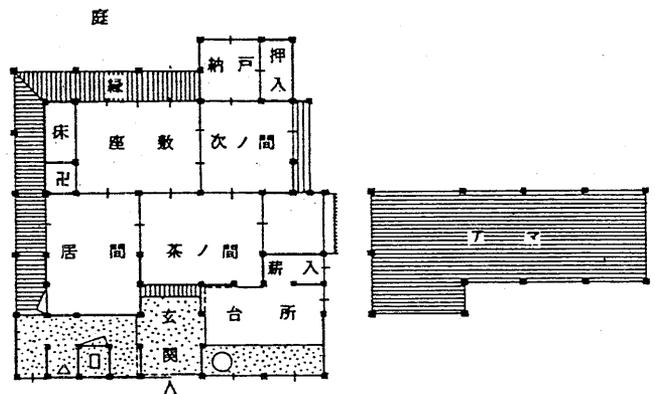
現代住宅の歴史性を考える場合にはまずその原点となるのは近世の住宅であろう。そこで、ここでは金沢における近世住宅の住空間型について概観しておきたい。

近世はいうまでもなく封建的身分制のきわめてきびしい時代であり、土農工商の階級・階層構造は社会構造の根幹をなしており、住宅の規模・住空間型・住様式等もこれに照応している。そして土農工商の身分制は、われわれが一般に使用している武家住宅、農家、町家に対応している。これは階級的視点であり、もっとも基本的な近世住宅の類型である。しかし各階級内部においては、さらに上下の階層分化がいちじるしく、住宅の規模・住空間型・住様式等に差異をもっているが、武家住宅においてはとくにこの傾向が顕著であり、近代住宅に受けつがれていくのは主として下級武家住宅の様式である。したがって、近代住宅に先行する近世住宅の住空間型としては、下級武家住宅、農家、町家の3類型ということになる。もっとも農家や町家においてもごく上層の肝煎級、御用商人級の住宅があるが、武家住宅ほどのいちじるしい階層差を示さない。

1・1 下級武家住宅

下級武家住宅の例として足軽級居宅、下級平士居宅をとりあげる。

まず武家階級最下層を占める足軽級居宅についてみると、図1に示すように家屋前面にドマを置き奥部を居室関係とするが、前面のドマ部分は玄関を中央にして両側にガイドコロと便所を振り分ける。ドマにつづいてチャ

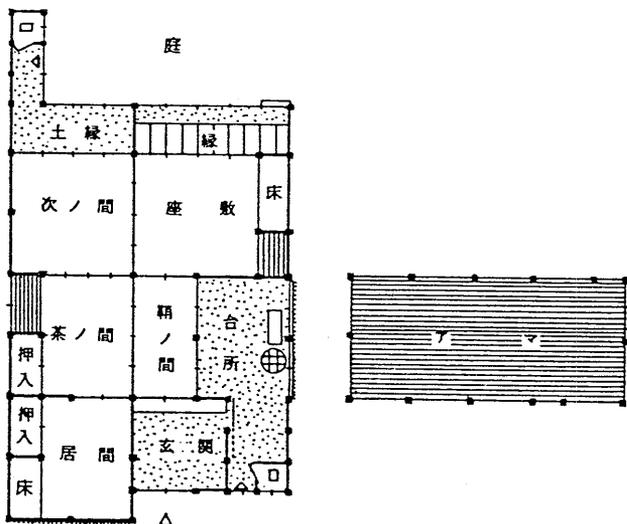


1階平面図

2階平面図

資料) 田中喜男『城下町金沢』(P.37)

図1 足軽級居宅



1 階平面図

2 階平面図

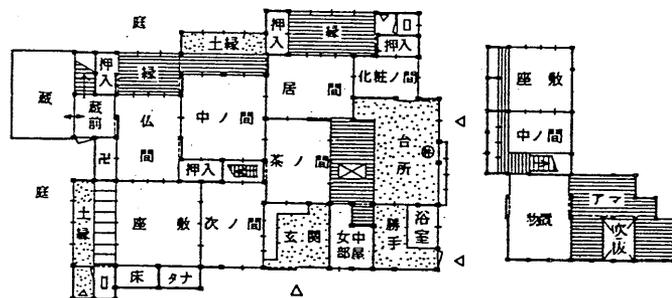
資料) 筆者調査図

図2 下級平士居宅 (40石取)

ノマ・イマなど生活的要素のつよい部屋を配置し、最奥部にザシキ・次ノマの儀礼的接客空間を置く。住空間の大きな構成手法は、ドマ→生活部分→儀礼部分となり前面ドマを下手、背後の儀礼部分を上手とする空間概念がみられると同時に、玄関は不充分ながら独立性をもっている。

つぎに足軽より少し上位の40石取下級武士居宅をみると、図2に示すように玄関の独立性もやや高まり、サヤノマ(通路)によってザシキ・次ノマへの進路が生活部分を通過することを避けている。さきの足軽級居宅では、玄関からザシキに到るのにチャノマを通過しなければならない。家屋前面を下手、背後を上手とし最奥部にザシキ・次ノマをとる構成手法はさきの例と同じであるが、ザシキ・次ノマのさきに縁・土縁・客用便所をつけ足しているのは多少格の高いことを示している。足軽級居宅でもハレとケの空間分離はいちおう認められたが、この下級平士居宅ではハレとケの空間分離だけではなく動線分離にまですすんでいる。

つぎにいま少し上位の70石取下級平士居宅をみると、図3に示すようにこのクラスまでくるとかなり武家住宅らしい住空間構成になってくる。まず最初に出入口は玄関と勝手口の2様に分れ、玄関が完全に独立する。また玄関で動線が2方向に分けられて一方はチャノマ・イマなどの生活部分方向、他方は次ノマ・ザシキの儀礼部分方向へ向う。住空間は大きく分けて右半分が生活部分、左半分が儀礼部分となろう。さきの40石取下級平士居宅と比べると、玄関の独立性、室数の増加(ブツマ・ナカノマ・化粧ノマなど)、土蔵の付帯などがより上位の家格を示すものとして評価される。



1 階平面図

2 階平面図

資料) 筆者調査図

図3 下級平士居宅 (70石取)

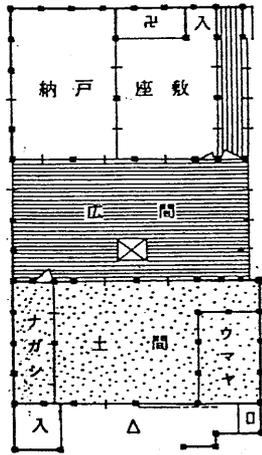
以上下級武家住宅を3例概観したが、明治以降の近代市民住宅のモデルとなりうるのはだいたいこのクラスまでの武家住宅である。ここで以上にみられる武家住宅の住空間構成上の特色を要約すると次の諸点になる。

- 1) 住空間は大きくドマとオエ(床張り部分)に分けられる。(住空間の基本分割)
- 2) ドマは水まわりを受けもち、この部分の不浄観からドマを下手、これから遠ざかる方を上手とする住空間の格式的価値観が現れる。またドマは家屋周辺(前面または側面)に配置される。
- 3) オエは諸室よりなるが、下手に生活部分(チャノマ・イマなど)、上手に儀礼部分(次ノマ・ザシキなど)を置く。
- 4) 武家の格式的な生活様式から玄関の独立性が求められる。
- 5) 次ノマ・ザシキの儀礼部分はハレ空間としての意識がつよく南または東に向う位置に配置される。
- 6) 各室は主としてフスマ障子によって区切られるため連続性をもつ。

1・2 農家

加賀平野に広く分布する農家は、図4に示すように妻入りのタテ屋造りである。前面に大きなドマを置き、つぎにドマとほぼ等しい面積のヒロマを設け、その背後にナンド・ザシキなどの諸室を配置する。この例では諸室は2室であるが、規模の増大につれて4室ないし6室となる。諸室が増加する場合、ザシキは最奥部に配置されドマを下手とみる住空間の格式的価値観が現れる。

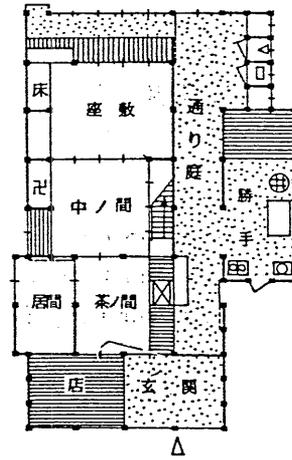
ドマを家屋前面に配置する手法は、さきの足軽級居宅にもみられたものであるが、農家ではとうぜん玄関が区切られず通路ないし作業場としてのドマと一体的である。しかしドマを前面に配置する手法は農家・足軽級居宅に共通する点であり、むしろ下級武家住宅の土着性を示すものであろう。



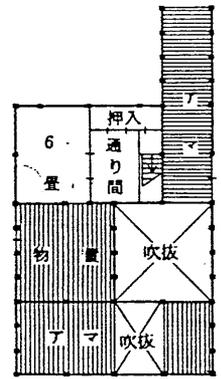
1階平面図

資料) 筆者調査図

図4 農家



1階平面図



2階平面図

資料) 筆者調査図

図5 町家

つぎにヒロマは加賀農家の特色といえるもので、チャノマ・イマの役割を果す空間である。さきの足軽級居宅で玄関から上ったところがチャノマであったのと考え合わせると、ドマ→チャノマ（ヒロマ）の構成は住生活の基礎部分をなすものとみられる。事実、土座ずまいが永らく明治期までつづいていた当地方の農家では、イロリを中心とした1室ないし2室（ドマ+ヒロマ）構成のものもけっして少なくなかったであろう。さきに例とした70石取下級平土居宅でも台所ドマと浜床（イロリを切った板床部分）は一体的でこの間の事情をうかがわせる。

ここでさきの下級武家住宅と同様の方法によって加賀農家の住空間構成上の特色を要約しておこう。

- 1) 住空間はドマとオエの基本的2分割がおこなわれる。
- 2) ドマは家屋前面に配置される。
- 3) オエはヒロマと諸室から成り、諸室は生活部分（ナンド）と儀礼部分（ザシキ）から成る。
- 4) 農家の作業的な生活様式からとくに玄関は設けられずドマと一体的である。
- 5) ザシキは武家住宅と同様南または東に面するように配置される。
- 6) ドマとヒロマの間には建具がなく、その他の室境は板戸またはフスマ障子で仕切られ室の連続性が確保される。

1・3 町家

町家はトオリニワに沿う室の列段構成が特色である。図5はその1例であるが、この場合はトオリニワに沿って、ミセ・チャノマ（イマ）・ナカノマ・ザシキの1列4段構成である。間口が大きくなると列数が増加し2列型となるが、奥行はだいたい4段どまりである。

町家の場合も住空間は大きく分けてドマとオエから

成っているが、ドマは玄関・ウチニワ・カッテが連続的で表から裏まで貫通する。稠密な町家のならばでは、背後の庭まで貫通する通路が必要とされ、いわゆるトオリニワが設けられる。またオエにおける室配置は営業のために前面にミセを置き、中央部にチャノマ・イマなどの生活部分を配置し、最奥部にザシキをもってくるが、この場合ザシキはトオリニワ（ドマ）と接し格式性がえられないので境界に壁を設け截然と区切る。2列構成ではザシキは上手最奥に位置づけられ、やはり住空間の上手・下手の格式性がよみとれる。

以上から町家の住空間上の特色を要約すると次の諸点である。

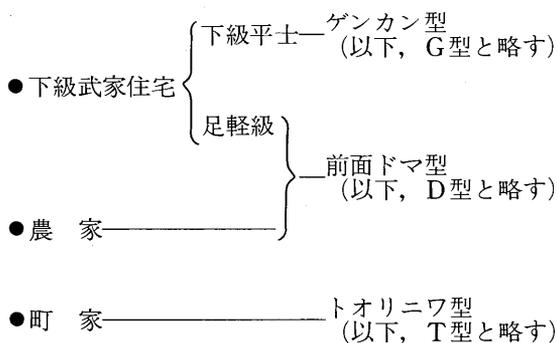
- 1) 住空間はやはりドマとオエから成る。
- 2) ドマはトオリニワとなって家屋側面を貫通する。
- 3) オエは列段構成を成す。標準的な構成はミセ・チャノマ・ザシキの1列3段構成である。
- 4) 玄関はトオリニワ前面にき、必ずしも独立性をもたない。
- 5) 町家は隣家と接して建ち並ぶので、武家住宅や農家のように配置に自由度がなくザシキの南面ないし東面性はえられない。
- 6) 各室はフスマ障子によって仕切られ連続的である。

1・4 近世における住空間の特質

以上、現代住宅の原型となる近世住宅の住空間構成について3つの類型（下級武家住宅、農家、町家）をみたが、武家住宅の格式性・農家の作業性・町家の営業性等、それぞれの身分ないし職業的要因を反映しつつ多様である。しかし他方では3つの住居種を貫通する共通性もあり、ここで3者の異同する点を求め現代における住空間の原型設定を行っておきたい。

- 1) 各住居種ともに住空間はドマとオエの2つの異なる空間からなる。
- 2) ドマは台所・通路・便所・フロ・物置・土縁等から成り、炊事・交通・サニタリー・収納・緩衝等の諸機能をもつ。これらは住空間の基礎構造をなすものであり、これらの空間の上に立って各居室での住生活が可能である。したがってドマは住空間の基礎的な部分を受けもつサービス系の空間（以下、S系空間と略す）である。
- 3) 一方オエは諸室から成るリビング系の空間（以下、L系空間と略す）であるが、この空間は大きく生活部分と儀礼部分に分けられる。前者はチャノマ・イマ・ナンドに代表される食事・団らん・就寝機能を受けもち、後者は次ノマ・ザシキ・ブツマに代表される接客・祭祀機能をもつ空間である。いわゆるハレとケの空間概念からみると、ドマ（S系空間）とオエ（L系空間）の生活部分がケ、オエ（L系空間）の儀礼部分がハレに対応するといえよう。また同時にハレを上手、ケを下手とする住空間の格式的価値観がみとめられる。
- 4) 3住居種の相違点として玄関があげられる。武家住宅では独立的、農家でドマと一体的で未分化、町家では半独立的である。
- 5) 武家住宅・農家におけるハレ空間の南面（または東面）性。
- 6) 3住居種とも各室は連続性をもつ。

以上のように近世住居の住空間構成は、とうぜんのことながらそれらが住居であることによる共通性と、しかしながら身分・職業的要因による相違点が複合した形となっている。こうした事実から、現代住宅の原型として近世住宅の住空間型を要約すると次のようになろう。



こうして、G型、D型、T型の3型がまずは近世住宅に、そして現代住宅へと受けつがれていくことになるが、ここであらかじめこれら3型の戸数比率を求めておく。それは住空間型の時代的変容を把握するのに必要と考えるからである。

近世住宅がまだ支配的な明治4年における金沢の住宅

のうち士族分をG型、卒族分をD型、平民分をT型に対応させると（『稿本金沢市央』市街篇・第3、pp.843～4）、

G型	— 4,932戸 (20%)	}	24,446戸 (100%)
D型	— 4,607戸 (19%)		
T型	— 14,907戸 (61%)		

となる。G型・D型ともに2割、T型6割の比率である。T型（町家）が圧倒的に多い。

2. 近代の住空間

ここでは明治、大正、昭和戦前期の建設にかかわる金沢市街部の住宅824例（筆者研究室調査）をもとに近代における住空間型の伝統性ないし近代性についてみておきたい。

さきの近世住宅の3型にみられた玄関の扱いやドマの位置等からみて次の4型が類別される。

- 1) ドマを平面の側面や背後におき、玄関を独立的に扱う型。この型はいうまでもなく3原型のG型の系列につながるものである。
- 2) 主屋内前面にドマを集約化している型。この型は3原型のD型の系列に属するものである。
- 3) 主屋内側面に貫通するドマをもつ型。この型は3原型のT型に属するものである。
- 4) さいごに主屋前方にドマを細長く突き出し、これを下屋的に扱う型。この型は3原型にはみられなかった型であり、近代型ともいえるものであるが、その家屋形状の特殊性から「前面突き出しドマ型」（以下、L型と略す）とよぶ。なおこの場合ドマの突き出し長さ1間以上をL型としている。長いものでは5間に及ぶ。

以上のように、金沢における近代住宅の住空間型は、原型としたG型・D型・T型の3型にL型がつけ加わって合計4型となり昭和期にいたるのである。

2・1 近代における住空間の継承・発展

近代における住空間型4型（G型・D型・T型・L型）が、明治期→大正期→昭和戦前期と時代の推移するなかでどのように変化していったかをみたのが図6である。各住空間型の時代的推移を戸数比率（%）でみると、

G型は29%→29%→25%となり、各時期を通じてほとんど一定の割合を示し、大きな増減はみられない。すなわち、G型は近代を通じて安定した継承性を持ち「ゲンカン型」への根づよい指向性を示している。したがってG型はこの面からみると「継承安定型」といえる。

つぎにD型は13%→20%→21%と推移しており、大正期から昭和戦前期にかけてやや増加する傾向を示し、「継承発展型」といえる。

住空間型	G 型 (ゲンカン型)	D 型 (前面ドマ型)	T 型 (トオリニワ型)	L 型 (前面突き出しドマ型)
住空間の構成概念図				
戸数 (%)	224 (27)	149 (18)	317 (39)	134 (16)
M: 明治期	73 (29)	32 (13)	131 (52)	17 (7)
T: 大正期	51 (29)	36 (20)	54 (31)	36 (20)
S: 昭和戦前期	100 (25)	81 (21)	132 (34)	81 (21)
戸数の増減傾向				
継承性	継承安定型	継承発展型	継承衰退型	新規発展型

図6 近代における住空間型

さらにT型は52%→31%→34%となり、明治期に比べて大正・昭和戦前期にはかなり大幅に減少している。いわば「継承衰退型」といえるものである。

さいごにL型は7%→20%→21%となり、明治期には7%と低率であるが、大正期・昭和戦前期には20%に達し伝統的なD型と同率になっている。近代における「新規発展型」といえる型である。

以上近代4型は近世3型を継承しながら安定的なG型、発展的なD型、衰退的なT型と新規に発展的なL型から成り、幕藩体制解体につづく近代市民社会の胎動が住空間の面にも読みとれるのである。

ふりかえてみると、明治4年における近世3型の戸数比率はG型20%、D型19%、T型61%であったから、近代頭初におけるこれらの値と近代末にあたる昭和戦前期の値を比較しておくと、

- G型 20%→25% (微増)
- D型 19%→21% (微増)
- T型 61%→34% (激減)
- L型 0%→21% (激増)

となり、近代における住空間の型興亡が明らかである。

2・2 近代における住空間の特質

とくにL型に代表される近代の住空間の特質とはどのようなものであろうか。まず最初に旧来のG型・D型・T型はほぼ方形の直屋であるのに対して、L型はドマ部分を主屋から突き出す角屋の形式になっていることである。つまりドマ部分が主屋から外化分離されているのが特色である。そしてこの「ドマの外化分離」傾向は、L型だけでなくG型やT型にもみられるのである。もっともD型は間口いっぱいドマを配置しているのでそれ自

体すでに外化分離されているようなものであるからとくにこの傾向は認められない。

こうしたドマの外化分離傾向をいまだし詳細にみるために、まずドマを突き出した住宅の戸数比率をみると、G型35%、D型0%、T型70%、L型100%となり、G型でもややこの傾向を示しているが、外化分離傾向のつよい住空間はT型・L型である。ちなみに突き出したドマの長さをa、幅をb、面積をAとすると平均的なa、b、Aは型別に次のようになる。

G型 a=3.1m, b=5.3m, A=16.4㎡ (9.9畳)

D型 —

T型 a=4.7m, b=2.5m, A=11.8㎡ (7.2畳)

L型 a=3.3m, b=4.0m, A=13.2㎡ (8.0畳)

これらの値によって外化分離されているドマの空間量がけっして少ないものでないことがわかる。面積的にみても7~10畳のドマが角屋として主屋から外化されているのである。G型では主として側面に、T型では背後に、そしてL型では前面に突き出しドマをもつ角屋が支配的となってくる。

このようなドマの外化傾向の理由は、いうまでもなくドマの機能そのものに由来している。さきにもふれたようにドマは水まわり(台所・浴室・便所・洗濯場など)、収納(納屋・物置など)のスペースから成り、住空間の基礎部分をなすS系空間が一体的に集約化されているところである。台所・浴室の排煙、便所の脱臭、洗濯場に付属する屋内物干場(多雨多雪の北陸の風土条件のもとでは屋内の物干場は必要不可欠である)の風通しなど外部空間との交流を必要とする採光・通風・換気・排煙効果が要請される。これらの諸機能はドマを主屋から外化することによってドマの開放性を高める中でより高度化される。これはドマ自体の合理化である。そしてこのことは必然的にオエの居住性、すなわちL系空間の性能を一段と高める結果となる。ドマの外化分離は結局、住空間におけるS系、L系の空間機能を明確に分化させ、それぞれの機能性を高め住空間の近代的秩序化・合理化を遂行したといえる。そうした近代性の中で角屋=ドマ(S系空間)、主屋=オエ(L系空間)の基本的な住空間構成が創出されるのである。

ところでこうしたドマの外化分離による近代化は、さきにふれたようにT型とL型にいちじるしい傾向であったが、この両者はドマの外化方向において正反対である。すなわちT型では後方に、L型では前方に外化する。町家の系統をひくT型では家屋前面は街路に接し側面は隣家によってふさがれるのでいきおい背後の空地に外化せざるをえないが、L型では新規の建設に際しこれを前面に外化することができた。このことはドマ(S系空間)と街路の接近性をえることになりT型より有利な条件をもつことになる。すなわち、①給排水経路の短縮、②食

料・燃料・排除雪具等ドマと関係の深い物品の搬出入の便、③汲取りの利便・ごみ処理の簡易化などがそれである。これらの条件は前面にドマをもつD型についてもいえることであり、S系空間の前面配置に共通するメリットといえる。この点最奥部にS系空間をもつT型は不利であり、T型が近代において減少していく一つの要因と考えられる。

以上は住空間の基本的分割にかかわるドマとオエの視点からの近代的特質であったが、一方諸室によって構成されるL系空間としてのオエの内容は近世とどのように異同するのであろうか。すでにみられた近世のG型・D型・T型の3型はオエの室構成についてはさして大きな変化もなく、というよりはむしろ旧来の構成手法を踏襲する形で受けつがれていく。ただそうした保守性の支配的な近代においても、社会経済的な近代化は否応なく進行し、住空間の成立基盤となる宅地の細分化を押しすすめていった。前掲明治4年の資料(『稿本金沢市』市街篇第1, PP.229~30)によって近代頭初の型別平均宅地面積を求め、これを実地調査による近代住宅の平均宅地面積と比較すると次のように推移していることがわかる。

G型 587㎡ (178T) → 292㎡ (88T)
 D型 165㎡ (50T) → 191㎡ (58T)
 T型 137㎡ (42T) → 136㎡ (41T)
 L型 ××××× → 266㎡ (81T)

武家住宅はもともと広い宅地(さきに例とした40石取下級平士居宅で120T, 70石取下級平士居宅で297T)を下賜されていた関係上、G型の宅地規模は大幅に細分化されている。D型は足軽級の宅地規模(藩政期御定書によると30~70T)をもとにやや増加する傾向を示しているが大差なく同等性が認められる。町家はもとより狭小・稠密である関係でT型は細分化されえずほとんど等しい。さいごに近代の新規創出型・L型の平均宅地規模は266㎡(81T)で近代G型の292㎡(88T)に近く、これらの宅地面積は金沢における近代住宅の平均的な宅地供給規模とみられると同時に、近世武家住宅の宅地分割が近代における新規の宅地供給源であったことをも示している。この事実はまたL型の近代創出型であることを裏づけてもいる。

こうした宅地分割・細分化は近世住宅に支配的な平屋建住宅を2階建住宅に立体化し近代化していく大きな要因であった。宅地規模に比較的余裕のあるG型やL型においても全床面積の30%程度を2階とし、最小宅地規模のT型では近世の中2階建から正2階建への近代化が漸進する。つまり近代住宅のいまひとつの特質は1階に重点を置きながらも2階による住空間の補足的・補充的展開がみられることである。すでに図示したように、近世住宅の2階(というよりは屋根裏といった方が適しいが)

はアマ(天)とよばれる収納スペースであったが、近代住宅においては2階の居室化が進行し住空間の立体化が顕著になってくる。この事実は近代市民生活の進展につれて、現代的な個室とまではいかないがすくなくとも家族の就寝分離への方向が現われてきているものとみられる。事実、近代住宅の1階を構成する諸室は、チャノマ・イマの生活部分、次ノマ・ザシキの儀礼部分が主たるもので、これらの諸室を寝室に兼用することは不可能ではないが、2階部分を寝室に当てることによって1階の生活的・儀礼的機能は一段と明確化される。この間の事情を近代創出型となるL型についてみておこう。

L型も他の型と同様小から大への規模分布をもつ。住空間の機能充足は住空間の規模とつよく関係するので1階の室数を基準として室名(室機能)、2階室数をみると次のようになる。

2室構成 C・I 2階=1.2室
 3室構成 C・I・Z 2階=2.2室
 4室構成 C・I・G・Z 2階=3.8室
 5室構成 C・I・G・T・Z 2階=4.8室

〔C:チャノマ, I:イマ, Z:ザシキ,
 G:玄関ノマ(タタミ敷式台), T:次ノマ〕

住宅規模の増大、室数の増加につれて室機能も多種となっていくが、それはZ, G, Tの順に付加されていく。最小の2室構成ではC・Iの生活部分のみであるが、3室構成ではZが現れてくる。つまりザシキの重視が目立っている。次の4室構成ではGが増加する。G・玄関ノマは武家住宅にみられる式台で、玄関ドマにつづくタタミ敷の3~6畳程度の室で客のとりつき、簡易な接客の空間であるが、近代住宅が過去の格式的様式を上層志向の中で取りいれていることがわかる。さいごの5室構成ではT・次ノマがつけ加わり、次ノマ・ザシキがワンセットとなるいわゆる「続き間」の形式が現われる。このT・Zの室構成もやはり武家住宅に由来するものであり、近世住宅の例とした40石取、70石取の下級平士級居宅にみられたものである。このように住宅規模の増大にともなう住空間の機能拡大はZ→G→Tのように進む格式的・儀礼的な性格をもっている。そして2階の2~4室はネマ(寝間)として使用される家族の専用的な空間として立体化されていったといえる。

以上にみた近代住宅の諸特質を近世住宅と比較しながら要約しておこう。

- 1) 近代においては原型となる近世のG型・D型・T型は受けつがられていくが、新規なL型が登場する。しかしいずれの型もドマとオエのS系・L系空間から成っている。
- 2) しかし近代住宅のドマは近世住宅のドマのように主屋内の一部を占めるのではなく、主屋から角屋として外化分離される傾向にあり、全住宅の約

60%がこの傾向を示しているが、残り約40%は宅地に余裕がなく外化分離を実現できなかったものも含まれているので、ドマの外化分離はかなり一般的な住空間の近代化といえる。

- 3) 他方オエについては2階建が一般化し、住空間の立体化が漸進していくが、1階はドマにつづくC・Iの生活部分とG・T・Zの前時代的要素をつよくとどめる格式的な儀礼部分が温存される。

この儀礼部分は幕藩体制時の封建的身分制から解放された近代市民社会において、むしろ上層志向的に歓迎・模倣されたきらいがある。したがって1階は食事を主とする生活部分と儀礼部分によって占められ、ネマが2階に補足的に設けられることになる。

- 4) 近代4型のうち玄関を独立的に扱う型は、G型、L型、D型の一部であり、近世3型のG型からみると玄関の独立的配置は進行している。この傾向は1階の儀礼部分とも関連する格式性の温存という面もあるが、玄関における動線処理という合理性おももっている。
- 5) 上記によっても明らかのように、儀礼部分の温存は必然的にこの部分のハレ意識をも継承し、この部分の南面ないし東面性を一般的傾向とした。したがって、生活部分の日照条件は下位のものとされる。
- 6) 各室の境界は主としてフスマ障子によるため旧来と同様基本的には連続的な性格をもつが、近代においては階段室・押入が一般化し近世ほどの連続性はなくなる。

3. 現代の住空間

以上近世、近代の住空間型の推移を概観してきたが、ここでは近代につづく現代住宅の状況を見る。現代とは戦後の昭和20年以降を指すが、戦後もすでに40年近くを経過しているし、またこの間の住宅をとりまく諸状況もかなり大きな変化を来たしているので、住空間の現代性をより鮮明に把えるために昭和50年代に建設された1戸建住宅326戸(筆者研究室調査)に基づいて話しを進めたい。

まず最初に気づく大きな変化はドマの消失である。近世・近代の住空間が大きくドマとオエに分割され、前者がS系、後者がL系空間を分担していたのに対して現代においてはドマとよびうるのは玄関ドマのみとなった。そして旧来のドマが集約的に担っていたS系空間はほとんどすべて床張りとなしオエ化された。したがって近世および近代住宅と現代住宅を統一的に論じるためには、S系空間ないしはドマ的空間としなければならない。

さて現代住宅についても近世や近代の住空間型を判別したと同様の方法(ドマ的空間とオエないしはS系とL系空間の関係)を用いると次の3型となる。

- 1) ドマ的空間(S系空間)を家屋前面に集約化して置く型。これはいうまでもなく近世・近代の前面ドマ型・D型の系譜に連なるものである。すなわちD型。
- 2) ドマ的空間(S系空間)を家屋側面に列状に配置する型。これも近世・近代にみられたトオリニワ型・T型の系統に属するものである。すなわちT型。
- 3) ドマ的空間(S系空間)によってオエ空間(L系空間)を分割する型。旧来ドマは家屋周辺に配置されオエを分断することはなかった。もっとも町家の中ドマ形式は分断型になるが、総じてドマは家屋周辺(主として前面・側面)に配置され外部との交流をえていた。その意味においてオエ空間の中にドマ的空間(S系空間)が貫通する型は現代的な現象であり、ドマ的空間(S系空間)の現代化がこのことを可能とした(以下、N型と略す)。

以上が現代住空間の3型である。それでは近代のG型・L型はどのように統廃合されたのであろうか。まずG型についてはドマの消失によって玄関ドマの独立性は必然的な帰結となり、すべての型に現象することになった。すなわち現代住宅においてG型はすべての型に吸収されたといえる。つぎにL型についてはドマのオエ化・現代化によりこれを外化分離する必要がなくなり消失する。近代T型において背後に外化分離されていたドマもオエ化され突き出し部分は消失して内部化される。そしてこのドマ的空間(S系空間)の内部化をもっとも押しすすめたところにN型——ドマ的空間(S系空間)がオエ空間(L系空間)を貫通するという事態——が発生する。

このような事態は、いうまでもなく台所の現代化(上下水道・都市ガスの普及、ステンレス流し台の設置、台所器具・設備の電化等)、便所の水洗化などドマ的空間の現代化によるところが大きい。しかしこの場合、本来ドマのもっていた諸機能のうちサニタリー機能(とくに屋内物干場)、取能機能、緩衝機能、作業機能等がとり残されてしまうという弊害をもともなっていることは注意されねばならない。いまドマのオエ化・現代化にまつわる利害得失について論じる余裕をもたないが、いずれにしてもこうした現代化によって、現代の住空間においては上記のD型・T型・N型の3型が基本的な型として浮び上ってくる。すなわち、

- D型：前面ドマ的空間(S系空間)配置型
- T型：側面ドマ的空間(S系空間)配置型
- N型：貫通ドマ的空間(S系空間)配置型

なおこれらの型と近代型4型との関連性を求めると、D型・T型は継承型といえるが、近代のG型はしいてこれを現代に求めるとN型ということになろう。

3・1 現代における住空間の継承・発展

現代の住空間3型の戸数（比率）は次のようである。

D型	77戸	(24%)	} 326戸 (100%)
T型	104戸	(32%)	
N型	145戸	(45%)	

近世における住空間型は封建的身分制によってほとんど一義的に決定された。これにつづく近代においては、封建的身分制からは解放されたがまだその残滓が色濃く住空間構成の基本的理念も前代を踏襲する面がつよかった(L型のような近代型を創出してはいるが)。すなわち、ドマの外化分離という近代的合理化は遂行されたが、他方オエについては儀礼部分のハレ意識（逆にいえば生活部分のケ意識）がつよく、住空間の基本的構成は儀礼部分の南面性ないしは東面性を原則とした。これに対して現代の基本的理念は生活部分の重視に移行しつつあることである（現在においてもハレ意識が完全になくなったわけではないが）。そこで結局L系空間の南面性ないし東面性が要求されてくる。つまりS系空間の北面性ないし西面性が原則となってくる。

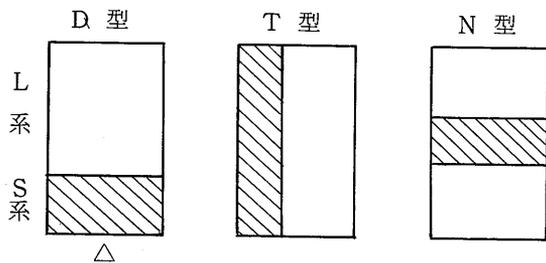


図7 現代の住空間型

この観点から現代のD型・T型・N型をみると図7によっても明らかなように、

D型は北入りまたは西入りに有利（2方向からのアプローチが可）

T型は南入り，東入り，西入りに有利（3方向からのアプローチが可）

N型は各方位からのアプローチに適応しうる（4方向からのアプローチが可）

となる。こうして各住空間型をアプローチの可能な場合数によってみると、

D型：T型：N型＝2：3：4

の比率になるはずである。すなわち、これをもって各型の戸数比率とすると、

D型＝2／9＝22%（24%）

T型＝3／9＝33%（32%）

N型＝4／9＝44%（45%）

となり、この戸数比率をさきの調査結果に基づく型別戸数比率（カッコ内に表記）と比較するとよく一致していることがわかる。現代の住空間型はアプローチの方向、それは結果的にL系空間の南面性ないし東面性となって現われてくる「日照理論」に基づいていることがわかるのである。近世や近代においてもハレ意識の中には「日照」の観念がまったく存在しなかったわけではなく、日照＝儀礼部分の図式が現代の合理的計画理念と懸隔しているにすぎなかった。もっともこの懸隔はかなり大きいものではあるが。

こうして現代の住空間型は「日照理論」とつよく関連していることが判定できるのであるが、その他住空間型に影響を及ぼすであろういくつかの要素についてみておく。その1つとしてまず最初に宅地規模・形状についてみるが、型別の平均宅地規模は、

D型	160㎡	(48T)	} 全型平均169㎡ (51T)
T型	149㎡	(45T)	
N型	187㎡	(57T)	

となり、D型・T型はほぼ等しくN型がやや大きい。S系空間を前面ないし側面にまとめるD型やT型は、かつては足軽級居宅（または農家）や町家にみられた型であり、小宅地の住空間型としてはすでに現存していた型で、いわば小宅地型住空間として一定の合理性をもっていたものである。このあたりに合理的な歴史性がうかがえ、住空間型の継承性が認められる。またN型については、他の2型よりやや大型の宅地規模をもっているが、S系空間を住空間の中に貫通させるにはそれだけの住空間規模、したがってそれに相当する宅地規模を必要とするのである。現代においては武家住宅の直系となるG型を設定することには無理があるが、しいていえばこのあたりにG型の間接的な連続性・継承性を読みとることは不可能ではない。ここで近代住宅4型の宅地規模と現代住宅3型のそれを比較しておく、

G型 292㎡ (88T) → ×××××

D型 191㎡ (58T) → 160㎡ (48T)

T型 136㎡ (41T) → 149㎡ (45T)

L型 266㎡ (81T) → ×××××

N型 ××××× → 187㎡ (57T)

となり、現代の宅地事情からしてD型・T型がもともと生きのびる性格をもっていたことがわかる。

つぎに宅地形状についてみると、型別の平均宅地間口×奥行（宅地細長比＝奥行長さ／間口長さ）は、

D型	10.6×15.1㎡	(1.42)	} 全型平均10.9×15.5 (1.42)
T型	10.1×14.8㎡	(1.47)	
N型	11.6×16.1㎡	(1.39)	

となる。ここでも各型の差はそれほど大きいものでないが、多少N型が正方形よりの形状をもっている。今日の宅地供給の状況から考えると、平均的に169㎡(51T)程度の面積、間口10.9×奥行15.5m(細長比1.42)程度の形状の宅地は首肯される場所であるが、これらの値からみると宅地の規模ないし形状が住空間型に決定的な影響を与えているとはいえず、多少N型において宅地の大型化、方形化がみられるにすぎない。やはり日照理論による住空間型の決定が確認される。

こうした宅地規模・形状を与件として成立する住空間の規模・形状を検討するため建物間口×奥行(細長比, 同上)を型別に列挙すると、

D型	7.5×10.5㎡	(1.40)	} 全型平均8.1×10.6㎡
T型	7.3×10.1㎡	(1.38)	
N型	8.9×11.0㎡	(1.24)	
			(1.31)

となり、建物規模・形状は与件となるさきの宅地規模・形状にかなり忠実に相似的であることがわかる。今日のように狭小化されつつある宅地事情のもとではそうならざるをえないであろう。

もっともそうしたきびしい宅地条件のもとではあるが、建物形状にまったく自由度がないわけではなく、多少の凹凸をつけ変化をつける場合がある。これはL型や雁行などの形態の変化であるが、このことは宅地規模ひいては住空間規模とも関連するので、規模を1階の室数で代表させ、また建物の凹凸の具合を

$$\text{凹凸率} = \left(1 - \frac{1 \text{階床面積}}{\text{全間口} \times \text{全奥行}} \right) \times 100\%$$

で求めるとその結果は図8のようになる。

図によって明らかなように、D型・T型は規模の増大につれて凹凸率の高まる傾向を示しているが、それにしても総体に凹凸率は低い(平均凹凸率はD型16.3%, T型12.2%)。これに対してN型は規模とはあまり関係なく一定で他の2型より高い率を示している(N型の平均凹凸率は21.2%)。S系空間を前面ないし側面に集約化するD型やT型では建物形状も整形化されるが、S系空間によってL系空間が分断されるN型ではやや不整形化の傾向をもっている。つまり分断されたL系空間がS系空間を軸として前後左右にずれ、住空間に変化を与えるのである。このような傾向は近世・近代の庶民住宅にはみられなかった住空間構成手法(上層の武家住宅・町家には雁行はしばしばみられるが)であり、N型の現代性を示す1要素でもある。

3・2 現代におけるL系空間の組織

前節ではS系空間とL系空間の関連の仕方によって住空間の基本的な型といったものをみてきた。そして旧来ドマであったS系空間のオエ化・現代化が従来みられな

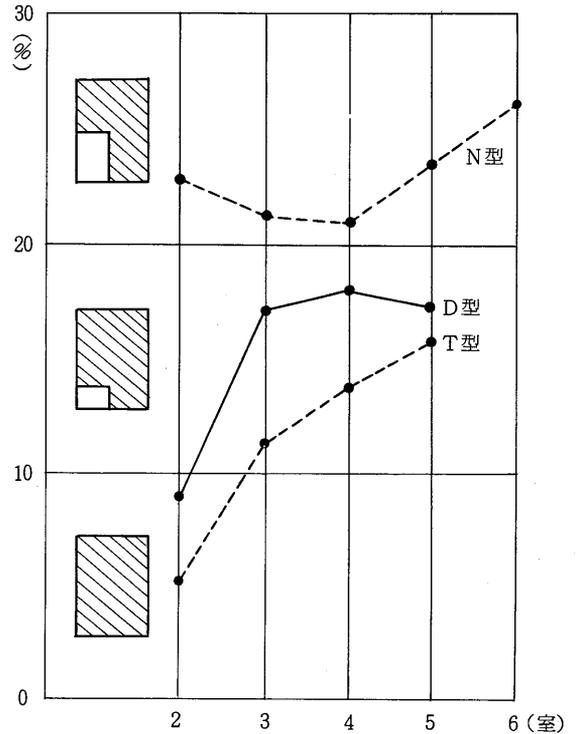


図8 住空間の型別凹凸率

かったN型を発生させていることを述べた。こうしてS系空間の現代化は明らかなのであるが、他方のL系空間については現在どのような状況にあるのだろうか。ここでL系空間を問題としたい。

ドマのオエ化がS系空間の近代から現代への大きな変化であったが、これに対応するL系空間の大きな変化はやはり洋風化(イス座化)の風潮であろう。この傾向はすでに近代においてもごく限られた上流階級にはみられたものであるが、一般的な傾向として普及していくのは戦後のことであり、現代化のきわだったメルクマールとなるものである。

さてそこで旧来の伝統的な和風(ユカ座)と現代的な洋風(イス座)を室機能と対照させながらL系空間の組織を表わしたのが図9である。

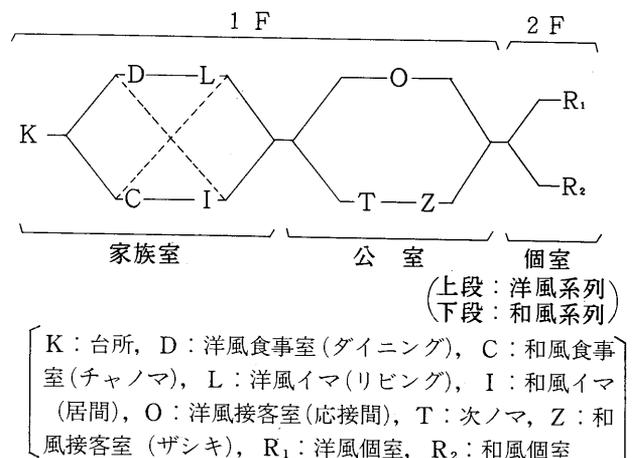


図9 L系空間の組織

図のようにL系空間は大きく家族室、公室、個室に分けられ、現代では2階建が一般的であるところから家族室・公室は1階、個室は2階に配置するものが多い。そして家族室、公室、個室ともに和洋が対応する。各部分ごとに和洋いずれの傾向がつかいかわかるといいたい、その際考察の対象が主として家族室、公室になるのでこれらの集中する1階の室数を基準として住空間規模とも関連させ、和洋の多寡によって現代L系空間の傾向ないし指向性を判定していく(表1)。

まず家族室は、台所、食事室、イマの3者の組み合わせおよび和洋が問題となる。そこでまずKの専用、兼用をみると、

K	47%	} 101%
KD	48%	
KDL	6%	

となり、K兼用がK専用をやや上まわっており、とくにK兼用のダイニング・キッチンとK専用はほとんど同率である。つまりKとKDが折半する形をとっている。したがって現代においては旧来のK・C(台所・チャノマ)型の住様式からかなりの戸数がKD型に移行していることが明らかである。戦後の住様式の変化の中でもダイニング・キッチンの普及はめざましいものがあったが、ここ北陸の金沢においてもこの傾向は明らかにみてとれるのである。しかし不思議なことに、1階室数との関係

表1

1階室数		1室	2室	3室	4室	5室	6室	平均	
1階 (戸数比率・%)	K	—	—	52	44	48	63	47	
	KD	—	50	42	53	52	38	48	
	KDL	100	50	6	3	—	—	6	
	D	—	—	1	7	8	50	6	
	DL	—	—	17	7	8	—	10	
	L	—	13	14	23	28	25	20	
	C	—	—	3	6	8	25	5	
	CI	—	—	18	13	16	—	14	
	CIT	—	—	13	13	12	—	12	
	I	—	50	18	32	36	63	28	
	IT	—	—	17	19	12	13	17	
	O	—	—	2	24	36	50	16	
	T	—	—	3	34	60	63	24	
	TZ	—	38	85	98	100	100	91	
	R ₁	—	—	2	2	8	25	3	
	R ₂	—	—	8	26	68	88	21	
	2階 (室数)	R ₁	1.5	1.4	1.3	1.4	1.6	2.0	1.4
		R ₂	1.0	1.3	1.2	1.2	1.0	1.3	1.2
小計		2.5	2.7	2.5	2.6	2.6	3.3	2.6	

注) 複数文字記号は、1室の複合的機能を示す。

でみるとKDの率は規模とあまり相関していないのである。すなわち、1階室数別にKDの率をみると、

2室構成の場合	50%
3室構成の場合	42%
4室構成の場合	53%
5室構成の場合	52%
6室構成の場合	38%

となり、6室構成の場合はやや低率化しているがその他では約50%と一定している。もともとダイニング・キッチンは小住宅(たとえば2DK)の住空間合理化の手法として開発されたものである以上、室数の増加につれて低率化するのが当然であるとおもえるが、上の結果ではそうになっていない。そこで考えられるの次のことがらである。

- 1) 室数が増加しても食事室を別にとりよりダイニング・キッチンとして面積を節約し、余った面積は他の用途にふり向けようという「面積節約的合理主義」。
- 2) 住生活における行動様式は活動的なものから安安静的なものまで(立つ・腰掛ける・すわる・ねそべる)があるが、イス座は「立つ」に近い活動性を持ち、とくに主婦の炊事・配膳等との関連からダイニング・キッチンの活動性を評価する「行動様式的合理主義」。
- 3) 以上のような合理的認識はとくになく、斬新な住生活様式としていわば無批判にダイニング・キッチンを採り入れたという「流行追随主義」。

これらについては金沢における北陸の住様式の考察が必要であるが、これについては後にふれる。

つぎにKを独立させ炊事専用空間とするもの(47%)については、とうぜん食事室が必要であるがこれの和洋をみると次のようになる。

洋風	D	6%	} 16%
	DL	10%	
和風	C	5%	} 31%
	CI	14%	
	CIT	12%	

さきのKD(48%)およびKDL(6%)を含めて食事室を洋風とするものは実に70%に達し、和風とするもの31%をはるかに上まわっている。この値をみると食事室の洋風化が現代ではひじょうに進行しているといえる。ただKが独立した場合は、さきの行動様式的合理主義はKDほどに成りたないためか和風食事室の率が洋風のそれをやや上まわっている。また1階室数と関連させてこうした傾向をみておくと、食事室を洋風とするものの率は、

1室構成	100%
------	------

2室構成	100%
3室構成	66%
4室構成	70%
5室構成	68%
6室構成	88%

となり、規模との相関性はほとんど認められず一定に高率である。要するに食事室の洋風化は規模の大小を問わずひじょうに進行しているといえる。

つぎにイマ関係についてみると、

洋風	{	KDL	6%	} 36%	注) 両者の和が100%を越えているが、この分7%は洋風、イマと和風イマの両者を1戸内にもっているものである。
		DL	10%		
		L	20%		
和風	{	CI	14%	} 71%	
		CIT	12%		
		I	28%		
		IT	17%		

となり、イマは和風(居間)が洋風をはるかに上まわっている。さきの食事室とは正に反対の関係にある。つまり食事は洋風、団らん・くつろぎは和風ということになる。

つぎに公室関係についてみると、

洋風	{	O	16%
和風	{	T	24%
		Z	91%

となり、和風のザシキ(Z)が圧倒的に高率である。また次ノマ(T)とZを連続させるいわゆる「続き間」は24%で、それほど高率ではないが武家住宅に由来する格式的構成が現代にも尾をひいている。

さいごに個室関係についてみると、

洋風	{	R ₁	3%	} 24%
和風	{	R ₂	21%	

となり、1階に個室をもつ率は24%で全体としてみると大半の住宅は1階に個室をもたず2階部分がこれを受けもつ。これについてはさきにもふれた。また1階の個室は和風が優勢である。同様に2階の個室についてみると、その平均室数は2.6室で、

洋風	{	R ₁	54%	} 100%
和風	{	R ₂	46%	

となり、洋風がやや和風を上まわっているが、1階と2階をあわせて個室をみると、和洋はほぼ半々とみられる。夫婦室・老人室の和風、子供室の洋風という傾向が明らかである。

以上、現代の住空間の要素としての室およびその組織

についてみてきたが、さいごに頭初に分類した現代の3つの住空間型、D型・T型・N型と室の関係についてふれておきたい。もともとこれらの型はS系・L系という住空間の基本的な組織からの分類であり、居住室は一括してL系空間として扱っている。そこで住空間の基本的な3型と室の関係について補足しておかねばならない。

歴史的にみるとL系空間の大きな特色は、かりに異った機能をもつ室でもフスマ障子による可動間仕切の連続的なものであった。しかし現代においてはプライバシーの要求等から室の隔離性が以前より重視されるようになってきた。そこで、ここではそうした室の隔離性について3型の特色をみておきたいのである。壁および廊下等の空間(S系空間)によって個室的に他の室から隔離された室の率は、

O(応接間)	96%
Z(ザシキ)	32%
R(個室)	82%

となる。その他の室は昔ほどではなくてもかなり連続的であるので、O・Z・Rが隔離性を要求される室とみられる。各型についてそれらの値をみると、

D型	O	67%	Z	10%	R	67%
T型	O	100%	Z	21%	R	88%
N型	O	100%	Z	49%	R	83%

となり、D型、T型、N型の順に隔離性は高まっていく。前面にS系空間をまとめるD型では背後のL系空間は日・目・田等の字形の室構成になり旧来の連続的な室が並ぶ結果となる。しかしそのような状況の中でもRの隔離性は67%に及び、プライバシーはかなり尊重されている。またOの隔離性も同率であるが、これは応接間を生活部分から切り離す現代的ハレ意識の現れといえよう。つぎにS系空間を側面にまとめるT型は、S系にそって室が並ぶ構成をとりD型と同じように日・目・田等の字形配置になるが、側面S系空間からの室へのアプローチが可能であるため室相互の連続性(通路機能)は必要とされず、室の隔離性はD型より進行している。応接間は100%、個室は88%に達している。さいごにN型はS系によってL系空間を分断する型で、一方に生活部分(主として家族室)、他方に上記のO・Z・R等を配置するもので、D型やT型が壁によって隔離性をえているのに対して、この場合は建築的空間によって室を分離する隔離度の高い構成となる。こうしたN型では他の2型に比べてザシキの隔離率がかなり高いことが注目される。他の応接間や個室はとうぜん高い隔離率と隔離度をえており、ザシキをも含めて公室・個室を高度に隔離しようとするのがN型の特色である。伝統的な室の連続→壁による室の隔離→建築的空間による室の隔離という流れからみても、N型はもっとも現代的な住空間型として現れてきたものといえる。

上記のように家族室を生活部分の核として公室・個室に隔離性を与えようとするのが現代的傾向といえるが、個室の隔離性はプライバシーの要請という観点から充分首肯されるものの、公室の隔離傾向は洋風応接間が先行し和風ザシキがこれを追う形をとっている。応接間が現代的ハレ意識（ということはかなり示威的・形式的側面をもつ）からほとんど100%隔離されるのに対して、ザシキは旧来のC→I→T→Zの伝統的室構成から脱却しえない事情にあると同時にCI・Z構成によるザシキの生活化の方向もあり、旧来のハレ意識の現代的表現としての隔離性は応接間に比べて低く4割程度に止っている。

3・3 現代における住空間の特質

以上にみた現代住宅の諸特質を近代住宅と比較しながら要約しておく。

- 1) 近代の住空間型G型・D型・T型・L型のうちG型はしいていえば現代のN型に、またL型はD型に吸収され、結局現代においてはD型・T型・N型の3型に分類される。
- 2) 近世住宅にみられたドマ（S系空間）は、近代においてはよく継承されていたが、現代においてはドマのオエ化が徹底し住空間の現代性の大きなメルクマールとなっている。これによって旧来のS系空間はL系空間と同列化し（ハレとケの差が短縮し）、その極端な現象としてS系によってL系を分断する現代的なタイプN型が発生している。
- 3) 他方オエ空間においては、近代の和風に対して現代の洋風化が大きい特色である。家族室におけるダイニング・キッチン、個室の確立・洋風化、公室の応接間などオエの各部分に洋風化の傾向がみられるが、総じて生活的要素のつよい部分に洋風化の傾向がつよい。ダイニング・キッチンの普及率は約5割（戸数比）、個室のそれは約3割、応接間のそれは約2割である。
- 4) ゲンカンの独立的扱いについては、ドマのオエ化により必然的に玄関ドマが独立化した（現代住宅でドマ・下足スペースとなるのは玄関ドマのみである）。
- 5) 旧来のハレ意識による儀礼部分の南面ないし東面性は、現代ではL系空間の南面ないし東面性に移行し、さきのD型・T型・N型はこの日照理論によって生じている。伝統的な次ノマ・ザシキはL系空間に含まれることによって日照権をえるのであって、この意味から家族室と公室が連続してL系空間を構成する場合が多い。
- 6) 近世・近代住宅ではフスマ障子による室の間仕切が支配的であったのに対して、現代では壁ないし建築空間的に室を隔離する傾向（これも洋風化の

一つのあらわれとみられる）があり、それは個室と応接間にいちじるしい。とくに応接間の隔離性はつよく、現代的ハレ意識のあらわれとみられる。

4. 現代における住空間と住様式の問題

以上住空間の現代的状況のみてきたが、食事室の和洋についての問題が北陸的住様式ともからんでくるので、現在優勢であるダイニング・キッチンの使われ方を採りあげておきたい。

まず公営住宅3DK型住戸87戸（金沢市みどり団地、H-2号棟、筆者研究室調査）について食事の場所をみると次のような結果がえられた。

もともと3DK型はDKにおいて食事をするを前提として計画された住戸であるが、実際の使われ方を調べてみると必ずしもそうはなっていない。表2に示す

表2 3DK型住戸における食事の場所

(戸数比, %)

区分	朝 食		昼 食		夕 食		平 均	
	DK	CI	DK	CI	DK	CI	DK	CI
夏	69	31	57	44	60	40	62	38
冬	54	46	46	54	47	53	49	51
平均	62	38	51	49	54	47	56	44

注) CIはチャノマ兼イマの和室を示す。

ように、平均的にみると食事の場所は、

$$\left. \begin{array}{l} DK \quad 56\% \\ CI \quad 44\% \end{array} \right\} 100\%$$

となり、DKがCIをやや上まわっているが、それにしても4割強の世帯がCIで食事をしているのが実情である。ここには食事のユカ座指向ないしは団らん化の傾向が大づかみにみてとれるのであるが、いますこし詳細にその間の事情をみるため、日サイクル、季節サイクルの変化を調べると、日サイクルのDKの使用率は、

朝食	62%
昼食	51%
夕食	54%

となり、通勤・通学等朝の忙しい時間帯の食事はややDKの使用率が高くなっているが大きな差はない。つぎに季節サイクルのDKの使用率をみると、

夏期	62%
冬期	49%

となり、日サイクルの変化より大きく冬期では51%の世帯がCIを食事の場所としていることがわかる。このように食事の場所は日・季節によって差を表わすが、対極

的には夏期の朝食と冬期の夕食が対照するであろう。それは

夏期の朝食 DK69% CI31%
冬期の夕食 DK47% CI53%

のように変化しており、夕食のユカ座・団らん化の傾向がかなり明瞭に現われている。

また3DK程度の小住宅ではとくに世帯人数との関係もあると考えられるので、それについてみると、

2人世帯の場合 DK 54%, CI 46%
3人世帯の場合 DK 51%, CI 49%
4人世帯の場合 DK 60%, CI 40%
5人世帯の場合 DK 64%, CI 36%

となり、世帯人数の増加につれて和室3室は個室に使用される率が高まるのでDKの使用率がやや高まっているが、最高の5人世帯においても36%がDKを使用せず和室のCIを使用している事実は見逃せない。

以上のように、DK型の住宅でも日サイクル、季節サイクル、世帯人数によって多少の差はあるがかなりの率がCIを食事の場所としており、この場合DKはたんにKとして使われることになり計画的DKは必ずしも実際のDKではない。

したがって、さきにみた1戸建住宅の48%を占めるDK(本論ではKD)についても果してそれが食事の場所として使用されているかどうかは疑問であり、上記3DK型にみられた食事のCI指向を普遍化すれば、3DKより大規模な1戸建住宅では和室数も多くなりより一層つよく食事のCI指向が現れるはずである。それがとりもなおさず北陸の住様式の一つの特色でもであろう。そこで新興住宅地の1戸建住宅137戸について食事の場所を調べると次のようになるが、すでに3DK型で明らかのようにKとDKは流動的であるため、Kの面積(畳数)を基準とし、また北陸の住様式が特徴的に現われる冬期の夕食について和室の使用率をあげると、

K 3・4畳の場合 100%
K 5畳の場合 76%
K 6畳の場合 84%
K 7畳の場合 60%
K 8畳の場合 60%
K 9畳以上の場合 73%

となる。Kが3・4畳の場合、Kで食事することは物理的に不可能であるから和室の使用率は100%になってとうぜんであるが、KがDKとして使用される広さをもつ場合でも6割ないし8割がCI指向であり、さきの3DK型住戸の場合より明らかにCI傾向がつよく現われている。

こうした食事のユカ座傾向は、旧来のチャトマ・居間の和風の伝統が単純にひきつがれているというよりは風土的要請に由来するものとして積極的な評価をしなけれ

ばならないであろう。ホームコタツにはいって足元を暖かくして食事をし、また「あぐら」「ねそべり」等の安楽な体位でテレビを楽しんだり団らんをするなどの「くつろぎ」はユカ座でこそ可能である。洋風のイス座がかなり普及してきた現在ではあるが、本当の「くつろぎ」はユカ座にあるのではないだろうか。とくに冬期が問題となる北陸の風土のもとでは。

また伝統的なザシキについてその使われ方を559戸についてみると(筆者研究室調査)、

1. 家族の就寝室として 28% (戸数比)
2. 接客室として 71% (2.5回/月)
3. 客の宿泊室として 80% (7.1回/年)
4. 年中行事の場として 74% (3.3回/年)
5. 趣味・芸事の場として 16% (3.9回/月)

となり、いわば非日常的な用途にあてられていることがわかる。家族の就寝室としては28%しか使用されておらず、これは他方個室が普及していることをも示しているが、やはり旧来のハレ意識の揺曳する姿をここにみるおもしろいと同時に、住宅が家族とその日常的な生活の容器として機能する一方、非日常的・社会的機能をも受容しなければならない存在である以上、こうした公室としての存在価値もまた否定しえないのである。

むすび

ふり返ってみると、近世・近代・現代の3代にわたる住空間の変容過程は、基礎的な住空間の構成部分、ドマ(S系空間)・オエ(L系空間)の組織を基本として展開してきた。

すなわち、①近世におけるドマの周辺配置→②近代におけるドマの外化分離配置=オエの一段のL系空間化→③現代におけるドマのオエ化=ドマ的空間(S系空間)の内部化連続配置。この過程において、現代住空間の保有する問題点は、

- 1) ドマのオエ化に際して、ドマが本来もっていた機能を部分的に捨象したこと。したがってその分住空間量も削減されている。しかしこの現象はむしろ空間量の削減を目的としたS系空間の機能削減とする方が正しいかも知れない。
- 2) 一方L系空間については、近世の生活部分・儀礼部分→近代の生活部分強化(2階化によるネマの補設=個室の前身)・儀礼部分の温存(一定の公室化)→現代における生活部分の強化(2階の個室化・隔離化、L系空間の日照理論配置)・儀礼部分の公室化(応接間の現代的ハレ意識、ザシキのハレ化と生活化の2方向分離傾向)。このような現代的傾向は、結局洋風化(イス座化)と旧来の和風(ユカ座)の相剋とみなしうる。すなわち伝統性

と現代性。

- 3) さらにL系空間の核となる家族室について、北陸的風土性のもとではユカ座の要求がつよくイス座にはなじみにくいこと（たとえばDKの普及率は約50%に達するが、これをDKとして使用するものは半数に充たない）。また公室については洋風応接間の現代的ハレ化（形式的導入の側面がつよい）。

この小論がテーマとした「住空間の伝統性・現代性」のうち、「伝統性」は地域的・地方的固有性がつよく、一方「現代性」はこれに対して全国的普遍性がつよい。いちおう前者を和風、後者を洋風とする観点は可能であるが、和風の中には地域・地方の住生活に即した風土的合理性と旧来の封建性が混在している。しかしながら現代の住宅事情の中では、いずれにしても住生活の合理化の方向に向わざるをえず、ムダな封建的要素は切り捨てられていくであろうが、他方洋風化＝合理化ともいいかねる。それは風土的合理性をもつ場合の話であって、おそらくここに伝統性と現代性の問題があろう。そしてそれは地域ないし地方の住様式とつよく結びついている。

以 上